

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木 優子

55

「私もね、なんだかとても気持ちよくなってしまつて・・・」と返事をすると、すぐに和樹から返事が来た。

「なに?それ、どういうこと!?!」

「だって、和樹さん、さつき車の中で私の胸を・・・」

「んああく!こめんね、あんな失礼なことして、マジこめんね。」

「いいよ、でもそのせいで、優子めっちゃ感じちゃったんだよ♡」

「えっ!?!で、それからどうしたの?」

「だからお風呂の中で・・・」

「うん?お風呂で?何?」

「だから、シャワーで・・・んもう!こんなこと言えないよお。」

「シャワーで気持ちいいことしちゃったの?」

優子はわざと返信を遅らせた。

「・・・うん・・・和樹さんのことを思い出しながら・・・」

「えっ!!♡ああ、優子、嬉しいよ。僕もだよ。ああ、優子、僕が優子のことをもっと

気持ちよくしてあげたいよ。」

「うん、して。」

「ああ、かわいい優子、優子のすべてを味わってあげたいよ。」

「嬉しい。」

そう返信しながらも、優子はさつき夫の義弘が自分の中に出した熱い液体が流れ出てくるのを感じていた。しかも、もう何度も気持ちよくなったせいで、眠い。

「和樹さん、私、もう寝るね。こめん。おやすみ。」

「ああ、優子、いいよ、おやすみ。一緒に寝ようね。」

優子はその返事を読むと、今度は素早くシャワーを浴びると、すでに寝てしまつていた夫を起さないように、隣のベッドに滑り込むと自分も寝息を立てて寝てしまつた。

(続く)